

第14号

はらんきょう レポート

はらんきょうの会

<http://harankyonokai.com>

私たちは一人ひとりの人権が尊重される平和な社会を目指して活動しています。



ヒロシマ・ナガサキ そして敗戦から70年

今年是被爆そして敗戦から70年になる。70年というが当然ながら一日一日の積み重ねの70年、途切れることのない連続した時の流れの途上にある70年である。その歳月が今の日本のありようを映し出しているように思われる。

ヒロシマ・ナガサキの原爆そして戦争により日本国内外で多くの犠牲者を出してしまった。そしてまた残された人たちのその後の人生をも大きく捻じ曲げてしまった。こうした体験をしたにも関わらず私たちは（戦争を体験した人たちだけでなくその後生まれた人たちをも含めて）体験を経験としてこなかったように思う。そのつけが今、私たちの前に突き付けられているのではないだろうか。

原子力の平和利用と喧伝しすすめられた原発。そしてフクシマ原発事故。敗戦の日からすでに始まっていた沖縄基地問題もこれまで私たちが自分の問題として向き合ってきただけである。

日本人には自分の生活に直接関係がなければ頬かぶりしてしまう習性があるというわけでもないだろうが、人が痛みを感じていることに、痛みを訴えていることにあまりにも無関心でいることに馴らされてしまっているような気がしてならない。

被爆70年となり高齢化した被爆者の多くは原爆を落とした米国に憎しみを向けるのではなく「いかなる国の人達にも自分たちのような思いをさせたくない。私たちに時間がない。」と必死に核廃絶を訴えている。その思いを私たちは引き受ける責任があると思う。

先日メモノートを整理していたら次のような文章を見つけた。確か、数年前に読んだ本から書き写したものである。改めて心に留めておきたい。

「『一人の人の死に対して、たくさんの人間の悲しみのある世界を願っている』

と語っている人がいた。悲しみのある世界。そこには、それぞれの生が大切にされ、涙が流される。生を慈しむ願いから発する悲しみだから、悲しみは他者を思いやり、共生しようとする意思につながる。」
(加藤 記)

若い声

「あの夏の日の記憶」

ヒロシマ ナガサキ そして」

朗読劇に参加して

物井 英訓(30代)
毎年8月に行う朗読劇「あの夏の日の記憶」に参加して何年たったでしょうか。初めて台本を読んだときは学校の授業で歴史として学んだ戦争との違いにとっても驚いたことを覚えています。



実際に経験した方々の残した手記は理不尽な出来事への怒り、悲しみ、生への渴望、諦念が満ち溢れているものでした。戦後70年が経ち戦争経験者が少なくなってきた今日、この想いを伝える活動は現代を生きる私達の使命なのではないかという思いがますます強くなりました。

毎年朗読劇に来場してくれている方によりわかりやすく伝えることができるように朗読と共にスライドを投影します。また、情景が浮かぶような音楽を挿入したりと工夫を凝らしています。

朗読劇には小学生や中学生も参加してくれています。来場された方にはもちろんですが、朗読してくれている次の世代の子達にも平和の尊さを伝えられるように、そしてともに成長できる活動にしていきたいと思っています。

大和田 優子(20代)
はらんきょうの会の朗読劇にはじめて関わったのは高校1年生の時。朗読に関わるまでの私は、原爆や戦争については「いけないもの」という認識はあったが、それ以上深くは考えたこともなく、軽い気持ちで挑戦していたと思う。初顔合わせの時、当時朗読指導をしていた先生が、被爆された方の顔写真を見せてくれた。自分の軽率な思いを一喝されたような気がした。最初は戦争や原爆について考えもしなかったが、練習に参加していく度、被爆した方やその家族の報われなかった思いを朗読を通して自然と感じるようになった。今ではこの活動の大切さを実感し、10年くらいは関わっている。



今年で戦後70年。戦争経験者の方の高齢化が指摘され、後世に繋げていくことが課題となっている。こんな時代だから昔の大罪よりも今の暮らしに皆懸命になってしまうと思う。しかし、私達は過去を忘れず、後世に伝えていかななくてはいけない。はらんきょうの会を通して、私ができることを私なりに模索していきたい。



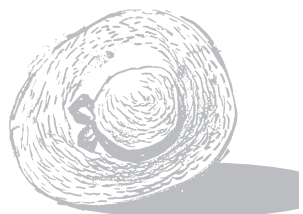
新会員紹介

松岡 祐美(20代)

戦後70年という節目の年に、「私たちに何ができるだろう」と考えます。この朗読劇に参加して10年以上が過ぎましたが、年々もっと多くの人にこの声を届けたい、届けなくてはいけないという思いが強くなっていきます。

“繋いでいく”ということは、ただ単に語ることだけではなく、それを記した人たちの想いを、その人自身を蘇らせることだと思っています。

戦争が遠い存在である人たちへ経験者の想いを伝えることで、遠い声をより近いものにしていきたいです。戦争を経験した者を家族に持つ最後の世代として、その声を後世に繋いでいくひとりとして。大きな役目を担って、私も精一杯生きていきます。



研修報告**丸木美術館** 2014年8月30日

被爆体験を朗読劇にして語る時、想像を絶する内容を「どう表現したらいいのか」平和ボケしている私は毎回苦しみます。「同じ思いを繰り返さないでほしい」という身を切るような思いで書かれた体験手記ですので、その思いに少しでも近づこうと、毎回関連の本や資料をあたりますが難しいです。

研修の目的の一つは、丸木美術館を代表する大作「原爆の図」です。被爆者一人一人がほぼ等身大に近く描かれており、当時の様子がリア

ルに迫ってきて、じっと見ていると老人や女の人のうめき声や赤ん坊の泣き声が聞こえてくるようでした。

また、当日は、加藤登紀子さんのトーク&ライブもあり参加しました。加藤さんは戦争当時赤ん坊で、母親の背中におんぶされていたようですが、お母さんは生きるために敵兵の家に行き家政婦として働き、パンをもらって帰ったそうです。戦争の中に置かれた母親・女の強さ逞しさに驚きました。中沢啓治さん作詞の『広島

愛の川』の歌にも魂を掴まれました。加藤さんの歌や語りに滲む平和への思いの原点は、お母さんの背中だったのですね。（中野 記）

男女共同参画・ 映画&トーク

2014年9月28日（アルテリオ・会議室）

☆第一部：映画**「潮風の村から～ある女性医師の軌跡～」**

渥美半島で性教育の重要性を発信している産婦人科医・北山郁子さん（87歳現役）の歩みの映画です。戦中、現東京女子医大に入学し、戦後内科医として夫と共に農村での船出でした。日々の診察を重ね女性達と向き合う中で、性の知識不足や人権を軽視する意識が暴力やセクハラにつながることを実感し、産婦人科医となりました。性教育の現場は、今も学校によって温度差があり、性感染症を強調する一方、避妊をきちんと教えなかったりしています。養護教諭がもっと指導しやすい環境になるとよいと思います。北村さんは「男女とも互いの体を大事にすることを指導するのが性教育。性イコール人権です」と語りました。

**☆第二部：トーク（山上千恵子監督）**

山上監督は、「なぜ、映画を撮ろうとしたのか？」の問いに「閉鎖的な半島で生きるたくましい女性の生き方に勇気もらった私の気持ちを表現した」と語りました。性教育については、「日常的に話せる機会がない。女性が性について知ると家族制度が崩壊？性について語る時代。中絶は、女性の体と心に痛みを伴うが、男性はなにもしない。性は女と男の関係性。人権教育としての性」と指摘しました。

性は生。性は人生そのもの。一人一人の一生に下半身の問題としてではなく、ジェンダーも含めて考えましょう！（清水 記）

**《アンケートより》**

- ◎北山郁子先生の女性の自立に向き合った生き方に感動した。性教育が必要なことはわかっていても、教えてもらえなかったことが問題だったのです。10代20代の若い世代が心配です。（70代女性）
- ◎女性問題について性(生物学的)の視点からの作品で、監督のトークもありわかりやすかった。（60代女性）
- ◎男女共同参画についても、性についても正しい知識を身につけられるようにしていくべきだと考えました。（50代女性）
- ◎トークのテーマにそった話し合いが、よかった。もう少し時間がほしかった。（60代男性）

おみたま男女共同参画推進フォーラムに 出前公演

2015年1月24日 四季文化館(みのーれ)

小美玉市より出前公演の依頼を頂いて、テーマを「女性も男性も輝く社会」に決め、早速台本作りに取りかかりました。

久しぶりの、はらんきょう版「茨城弁で語る女性差別撤廃条約」は、緊張はしましたが「女性議員の数が先進国の中で最下位…」や「女性だけじゃなくて女性と男性どっちも輝く社会じゃなくちゃダメだって事だな」等に会場の皆さんの拍手を頂いて無事終える事が出来ました。

(堤 記)



お知らせ

朗読祭 東京公演

一茨城・長崎・千葉・東京の5団体共催一

「ヒロシマ、ナガサキから70年、 そしてフクシマ、想いをつなぎ 平和を考える」

○日 時 2015年8月29日(土)

14:00 ~ 16:30

○会 場 Y M C A アジア青少年センター

(水道橋・東京)

★映画「何を怖れる」

試写会&上野千鶴子さんのトーク

○日 時 2015年11月1日(日)

12:30 ~ 16:00

○会 場 筑西市立中央図書館 視聴覚室

○資料代 500円(学生無料)

※9月15日 申し込み開始

★ 活動記録 ★

- 2014年 8月3日 朗読劇「あの夏の日の記憶」
自主公演 明野公民館大ホール
はらんきょうレポート 発行
- 8月23日 朗読劇「あの夏の日の記憶」
出前公演 明野公民館大ホール
「平和を考える市民映画会」
(主催:筑西市)
- 8月30日 丸木美術館研修 丸木美術館
- 9月28日 男女共同参画・映画&トーク
(共催:筑西市) アルテリオ
- 10月18日 茨城県女性のつばさ連絡会
県西地域研修会講師
坂東市さしま郷土館 ミューズ
- 11月14日 筑西市男女共同参画推進講演会
PRパネル展示 スピカ
- 2015年 1月24日 はらんきょう版「茨城弁で語る
『女性差別撤廃条約』」出前公演
おみたま男女共同参画推進
フォーラム(主催:小美玉市)
四季文化館 みのーれ
- 2月19日 総 会 明野公民館
※毎月第一木曜日 定例会

会員・賛助会員募集

会の活動を支えてくださるたくさんの皆様
方の応援が必要です。

一緒に活動してみませんか。

○会 費: 一般 年3,000円、学生 1,000円

○賛助会員: 年間一口 1,000円

★連絡先: TEL 0296-52-2590 (加藤)

編集後記

被爆から70年に成る今年、テレビや新聞などで数多く特集が組まれているようです。犠牲になった多くの被爆者が亡くなられ、70年たった今も身体の傷・心の傷と戦っているのです。苦しみはずっと続いているのです。

私たちはこれからも、朗読劇を通して戦争・原爆の悲惨さ、平和の尊さを伝えていきたいと思っています。(T)(編集委員:中野・堤)

